

(能)

西王母

子方 高原 一寿
シテ 高橋 憲正

ワキ 殿田 謙吉
ワキツレ 苗加登久治

間 中尾 史生

大鼓 田中 一義
小鼓 住駒 俊介
太鼓 麦谷 暁夫
笛 瀬賀 尚義

後見 松田 若子
福岡 聡子

地謡

高野 秀幸 佐野 弘宜
浅谷 之信 島村 明宏
船本 嘉人 藪 克徳
大澤 永靖 川島 英治

休憩 二十分

(狂言)

樋の酒

太郎冠者 山田 讓二

主人 荒井 亮吉
次郎冠者 能村 祐丞

後見 鍋島 憲

(仕舞)

鶉之段

島村 明宏

地謡

佐野 弘宜
佐野 由於
高橋 右任
山崎 健

(能)

忠

度

シテ 佐野 玄宜

ワキ 北島 公之
ワキツレ 平木 豊男

間 炭 光太郎

大鼓 飯嶋六之佐
小鼓 多田 順子
笛 江野 泉

後見 佐野 由於
山崎 健

地謡

米島 和秋 藪 俊彦
寺田 茂 渡邊 荀之助
田屋 邦夫 広島 克栄
松本 博 渡邊 茂人

能 西王母 (せいおうぼ)

比類のない聖徳を仰がれる帝王(ワキ)が臨幸し、大臣(ワキツレ)ら百官(ひやくしん)卿相の列座する宮殿に侍女(ツレ)を伴った天女(前シテ)が訪れて、三千年に一度花が咲き実の成る桃をその時機を得た聖主に献上したいと申し出ます。西王母の園の桃かと問い返す帝王に、天女は桃の花を捧げて仏法栄える聖代の末長いことを祝福します。我が目を疑う帝王の前をひとまず立ち去る際、天女は西王母の分身を名乗り、寿命尽きない天上の楽園に聖主の御威光が及びました、やがて桃の実を持って真の姿を現しますと予言して昇天します(中入)。舞樂を奏して帝王らが待つところへ、孔雀・鳳凰・迦陵頻伽など瑞鳥が飛び廻るなか、紅錦の御衣を着し剣を提げ(しんえい)晨纓の冠を戴く西王母(後シテ)が降臨して、玉盤に載せた桃の実を帝王に捧げます。花を浮かべた盃を手に酒宴もたけなわ、裳裾を翻して天女の舞を披露した西王母は、瑞鳥らと共に春風に乗り、空のかなたに翔り去ります。

狂言 樋の酒 (ひのさけ)

主人の留守に太郎冠者は米蔵を、次郎冠者は酒蔵を預かり、窓から覗き合って話さうちに、やがて酒蔵の次郎冠者が酒を飲み始め、しきりにうらやむ太郎冠者には、窓から窓へ樋(とい)を渡し、酒を流して飲ませてやります。酔って気持ち大きくなり、太郎冠者も酒蔵に入って、二人は留守番を忘れ、飲めや歌への酒盛に興じます。汲めども尽きぬ酒蔵を讃え、狸々(しゅうじょう)気取りで舞い遊ぶところを、帰宅した主人に見つかり、追ひ込まれます。

能 忠 度 (ただのり)

かつて俊成に仕え俊成没後に出家した僧の一行(ワキ・ワキツレ)が、西国(みんご)行脚の途中須磨の浦で年老いた山賊(やまがっ) (前シテ)に出会います。老人は山陰のひと木の桜を墓標として花を手向けています。日が暮れて僧が宿を借りようとすると、老人は「行き暮れて」の歌を詠んだのは薩摩守忠度と気づいた僧に、老人は夢の告げを待てと頼んで消えます(中入)。僧は弔うよりも都に帰り定家に報告することを思いますが、旅寝の夢に現れた忠度の魂魄(後シテ)も都への言づてを頼みます。それは俊成が撰進した千載集に忠度作の一首が入りながら、勅勘の身の上ゆえに詠み人知らずとされたことへの執着からでした。そして忠度の辞世「行き暮れて」の歌がどういふ状況で最期に発見されたかを、一ノ谷の合戦を再現する中で明らかにします。今度こそ定家が作者を忠度と明記して後世に伝えてくれるでしょうか。

(金沢大学人間社会学域教授 西村 聡)

次月の予定 平成三十年七月一日(日) 午後一時始

(能) 加茂物狂

(狂言) 寝音曲

(能) 大会